

が鳴ると、大勢の若者達が白鉢巻、白の腹帯をしめて、諏訪神社を皮きりに愛宕、太平山の各神社へ裸で御輿をかつき、参詣する。起源は不明。山伏僧の荒行の名残りともみる説もあるが、真冬の夜に冷水をあびて身体を清め、ジョヤサの掛け声で四キロの行程を練り歩くヤングの姿はまさに勇壮そのもの。県内裸参りのトップを切る行事である。

七月七日

満燈供養 起源不明。ネブ流しと同時に馬場目川で行われる。家族に亡くなられた人達や年忌にあたった家では小舟に供え物を積んで、燈明をつけて川に流し、死者の霊を慰める。七夕祭りの提灯が密集している川に数隻の小舟がローソクをともしながら、夜の川面を次々に流れて行く光景は、遺族を夢幻の世界に誘うであろう。また、生地を離れ、他郷の星を仰ぐ身にとって、この眺めは郷愁の一つとなろう。旧暦の行事である。

## 第五節 郷土芸能

### 一、願人踊

正徳四年（一七一四）に副川神社が高岡山に再興されてまもない頃、真坂、夜叉袋、一日市の三集落で踊っていたのを神社の祭典行事のプログラムに加えたものである。願人というのは下級山伏、修験僧のこと。のちに、伊勢、熊野信仰の

芸人となって、地方のドサ回りをして宗教を広めた。伊勢神宮は皇祖神として庶民の信仰を集め、とりわけ近世の慶安（一六五〇）と慶応三年（一八六七）の間は全国から信者が後をたたず、年間二〇〇万を動員した年もあったといわれている。

江戸の中期、天明のころ、羽立の村井金之丞が、伊勢参宮をしてその土産に伊勢音頭の手振りを従来の願人踊りに挿入したという。明治元年（一八六八）には歌舞伎・忠臣蔵（五段目）のユーモラスな寸劇を組み入れるようになった。その後、日清日露第二次世界大戦や敗戦後の祭典統一などで、あわや願人踊りは消えさったかに見えたが、昭和三十三年に一日市郷土芸能研究会がこの保存にのりだし、以後毎年五月五日行われるようになった。現在、一日市と真坂で祭典に行なっており、人気をよんでいる。歌舞のスタイルの部分は伊勢音頭を基調としている。

#### 構成人員

豊作礼と音頭あげ一人、踊り子四人、唄い手四人、定九郎、与一兵衛

装束 与一兵衛と定九郎を除く全員が女の長襦袢を着る。

音頭あげ 黄色のタスキをかけて、結んだ端を長くたらし、白足袋をはく。幣束、大鈴つきの豊作札をもつ。

踊り手 長襦袢に前垂れをかけ、下袴のすそをはしょって小鈴のついた手甲、脚絆をつける。頬かむりをする。

定九郎 歌舞伎鬘をつけ、どんぶくを着こみ、太い縄帯をしめる。左の肩に手拭いをかけ、長刀一本腰に差して蛇の

目傘（風流傘）を持つ。

与一兵衛 白髪を鬘に結び、縞の着物、手甲脚絆にわらじをはき、ドウラン（煙草入）を腰に下げて菅笠を負う。

唄い手 ひろげた傘のふちに小鈴のついた赤糸をたらず。傘の頭に幣束をたて、この中に入れて並列する。